

## Inside

**2**  
ボード便り  
.....Izumi Suzuki

**3**  
From the Administrator  
.....Jon Johanning

**5**  
Review  
.....Diane Howard

**6**  
JLD lineup unveiled for  
ATA Conference  
.....Benjamin B. Tompkins

**10**  
球體感覺  
.....Eric Selland

**11**  
Words & 言葉  
.....Jim Davis

**12**  
Chicago area translators  
help each other  
.....Susan Nakano

**Check out  
JLD's Lineup  
for ATA 41st  
Annual  
Conference on  
Page 6**

## 需要たっぷり、ローカライゼーション (その1) まず、何が必要か

By Hideki Ishii

ここ10年ほどの間にコンピュータ業界は目を見張る革新を遂げてきました。日々進化するコンピュータの技術にはついていくのが大変といっても過言ではありませんが、コンピュータの低価格化、インターネットの普及で今やコンピュータは私達の生活の一部となっています。読者である翻訳家のみなさんの中にはお仕事を手書きで行っている方はいないと思います。場合によっては数台のコンピュータを所有している方も多いのではないのでしょうか。コンピュータが一般家庭に普及すると当然のことながらコンピュータソフトウェアの需要も伸びます。ただ、日本ではソフトウェアの開発がアメリカより一歩遅れているようで、急激なソフトウェアの需要を満たすには日本でソフトウェアを開発するよりはアメリカで開発されたソフトウェアをロー

カライズ(現地化)するほうが得策であるようです。こうした背景の中、アメリカのソフトウェア開発企業は日本語へのソフトウェアのローカライズの作業をはじめました。

翻訳家である読者の皆さんはご存知のとおり、ローカライズの作業に欠かせない存在となるのが翻訳家です。翻訳家が担当するローカライズの作業内容(またはコンポーネントといったほうが正確であるかもしれない)は大きく分けて、ユーザーインターフェイス(UI)、オンラインヘルプ、プリントドキュメントの3つに分類できます。しかし、これらのソフトウェアローカライズの作業は複雑なもので、JLD Timesですべて説明することは残念ながら不可能です。そこで、今回はフリーランスの翻訳家の方々が一番関係する

Continued on Page 4

## IJET-2000を振り返って

By Shinji Nakano

このような会合があると人の態度は大きく三分されます。(1)全く参加しない、(2)ある程度参加する、(3)積極的に参加する。私の場合もし自分一人だったら(1)から(2)の間だったであろうが、妻のお蔭で何とか(2)へ納まっているといった具合です。

(1)の人たちの言い分はこんなところでしょう。「そんなところへ行ってくっちゃべってどうなるの? 暇があったら自分の実力を磨くことが大事じゃない。」確かにClosing PanelでのBill Lise氏のお言葉(後述)などを伺うと、一瞬そのような気がしてしまいます。

でも別な見方をすればそういう人たちは要するに人間関係を築くのが下手なだけの引込み思案なだけではないか!? と、かく言う私も同類であったのでしようが、

また外国で永く暮らすと「日本語」はわかって「日本の趨勢」のようなものはボケてくるものです。肝心なところで情報遅れをとっているのではないかと、という不安はいつもつきまといまいます。iモードって何? えっCメール? と日本の中高生くらいでも知っているような言葉がわからないで、果たして「技術系のトランスレーターです」なんて言えるのか!(成田からの高速でも早速「ETC」なるものを見かけて、思わずドキッとしました。)こんな不安を抱いているのならいっそのこと日本へ戻ったり、多くの日本人や日本に詳しい人たちとお話でもしてもらった方がよいのでは、.... というところでこのような催しは、そのきっかけとして最適なものです。このようなことを考えながら京都へ向かいました。

Continued on Page 8

# ボード便り

By Izumi Suzuki

2000年第二回目のボードミーティングは、6月9日～11日にかけてトロントで開かれました。これは私にとりボードメンバーとして最後のミーティングでしたので、皆様へのボード便りも今回で最後です。この3年間(ボードとしての任期は9月の大会の選挙で新ボードメンバーが選ばれるまで)ATAにおいて日本語部門に対する認識と、また個人としては通訳者に対する認識を高めてもらうよう、努力してきたつもりです。その間沢山の皆様から陰に日向にご支援頂きました。この紙面を借りて御礼申し上げます。

さて、ここからがボードミーティングについてですが、いつも述べるようにこれは時間の関係上、正式な議事録が出る前に特にJLDの皆様のためにまとめたものですので、公式議事録とは異なることをご承知おき下さい。

1. 冒頭の会長の挨拶で、Macfarlane会長が5月に日本を訪れ、ATAを代表してIJET-2000京都会議に出席し、多くの日英通訳者と会ってATAの推進に努めた旨を話されました。

2. 財務担当のEric McMillanからATAは相変わらず健全な運営状態という報告がありました。

3. 本部からは、5月31日現在会員数6,827名(昨年比5.8%増)、維持率は81.4%(昨年は80.5%)との報告がありました。この割で行くと今年末の会員数は7,700名が見込まれています。認定試験の方は、3月のボードミーティング以来新たに海外で3ヶ所、国内で2ヶ所行われることになっています。クロニクルは長いこと発行が遅れがちだったのですが、担当のJeff Sanfaconの努力でやっと追いつきました。

4. 認定試験委員会より5月に行われたLanguage Chairのワークショップ、認定委員会ミーティングその他の活動に付いての報告と、ATAで依頼した“Certification”の専門家

Michael Hamm氏の調査報告書に対する委員会の意見書が提出されました。このHammレポートは制度的な面から認定試験を見直したもので、今編集集中のクロニクルにその概要が掲載されますので、皆様ぜひお読みください。

5. コンファレンス・オーガナイザーのTom Westより、今年の会議の教育セッションは多くの申し込みより厳選したため、これまで以上に充実している、大変喜ばしいことだと言う報告がありました。

6. ボードの貴重な時間の一部を割き、戦略計画について話し合いましたが、これは結論を出す性格のものではなく、1)核となる会員は、2)法人会員の役割、3)“National organization with international orientation”の意味するものは、などについて意見を出し合いました。

7. 一部の会員より個人や中小企業を対象にした退職計画を採用してくれ、と言う希望があり、ワシントンペンションセンター社が提案した計画を採用し、会員に提供することが決まりました。

8. ボードメンバーのScott Brennanさんの動議により、ATAが『狙いを定めたマーケティング活動』のパイロットとして、今年10月にデトロイトで行われるSAE(Society of Automotive Engineers)のTopTecに参加し、TSD(日本語部門の方たちは皆さん登録していらっしゃいますね!)を配布することが可決されました。これが成功すれば、全国のいろいろな展示会で通訳者や通訳者を紹介していく良い機会となるものを選択し、参加していきたいとボードでは考えています。

9. Mentoring Programを提唱しているCourtney Searl-Ridgeさんの方からその進捗具合について口頭で報告がありました。

10. ATAなどの協会が属するFITが2002年にカナダのバンクーバーで会議を開くことになっていますが、その組織運営委員会の方からATAに協力を求める依頼があり、これには積極的に対処していこうと言う話し合いがありました。

11. 今回は初めてアメリカの国

境を越えてトロントが将来の年次大会開催地候補として挙げたわけですが、どのボードメンバーもトロントの町の国際性、町の人々の温かさ、宿泊ホテルの対応の良さに感銘を受けました。ホテル代に税金がかからない(後で返済してくれる)、為替レートの関係で非常に割安などもいい点ですが、うっかりパスポートを忘れると大変なことになる、という意見もありました。

12. 1日目のボードミーティングの後、地元の通訳者、通訳者と歓談するレセプションが開催されました。その席上で今回ボードを去るJo Anne Engelbertさんと私の為にケーキを用意して下さい、会長から私共のこれまでの貢献に対する温かい言葉をいただいて大変感激しました。

以上でご報告を終わります。確かにこの3年間は目の回るような忙しさでしたが、ボードを通じ日英翻訳・通訳以外に携わる方々と知り合いになれたことは、私にとってかけがえのない収穫でした。ボードメンバーは再選されれば6年まで任期を務めることが出来るのですが、日本語部門の皆様以前にお約束した通り、9月の大会からはAdministratorとしてお役に立ちたいと思っていますので、今後ともご協力よろしくお願い致します。

当ボード便りについてご質問、コメントなどありましたら、いつもどおり

suzukimy@mindspring.com鈴木までご連絡下さい。

Izumi Suzuki is an interpreter and a translator, ATA-accredited in both directions between Japanese and English. Izumi and her husband Steve Myers operate Suzuki-Myers Associates, Ltd. in Novi Michigan. Izumi is a member of the board of directors of the ATA, and is the Assistant Administrator of the Japanese Language Division.



# JLD Times

*Newsletter of the  
Japanese Language Division  
of the  
American Translators  
Association*

---

Editor: Manako Ihaya  
Publisher: Hideki Ishii

---

## *Contributors*

Jim Davis  
Diane Howard  
Hideki Ishii  
Jon Johanning  
Shinji Nakano  
Susan Nakano  
Eric Selland  
Izumi Suzuki  
Benjamin B. Tompkins

---

For more information contact  
Manako Ihaya  
27062 Springwood Circle  
Lake Forest, CA 92630 USA  
Tel: (949) 859-9672  
Fax: (949) 859-9683  
e-mail: manako@home.com

---

JLD Administrator:

**Jon Johanning**

Assistant Administrator:

**Izumi Suzuki**



The American Translators Association  
may be reached at:  
225 Reinekers Lane, Suite 590  
Alexandria, VA 22314 USA  
Tel: (703) 683-6100  
Fax: (703) 683-6122  
e-mail: ata@atanet.org

## From the Administrator

Jon Johanning



Our doughty President, Ann Macfarlane, has returned from IJET-2000 in Kyoto, and according to her forthcoming report in the Chronicle, which she kindly e-mailed to me, she had a great time. Professional language-worker as she is, she even picked up some Japanese; her kanji studies apparently progressed far enough for her to discover

that, while the “kyo” in Tokyo and Kyoto is the same, the “to’s” are not. She found that the IJET participants were very interested in the results of the ATA’s “Translation and Interpretation Services Survey,” as they compared with the translation business in Japan, and she was quite impressed with the hospitality associated with the conference. Don’t miss her report in the Chronicle!

Meanwhile, back home on the JLD front, I received word from Jim Davis that Ken Wagner has volunteered to serve as Assistant Administrator for one year until the next regular election. So for the next year, Izumi will become the Administrator and Ken the Assistant Administrator. I’m sure that the whole division will join me in expressing great appreciation to both for all their past and future contributions to the welfare of the division!

Finally, congratulations once more to the “Introduction to Translation” team for giving us a really splendid final product. Any JLD members who have contacts with educational institutions and other places where young people (and older ones, too) who might be considering translation or interpretation as a career may congregate should consider bringing this handbook to their attention. I know how relieved I am personally to have, at long last, a reference I can steer people who ask me “how do I get started?” to.

Stay cool this summer, and don’t forget to make your plans for the Conference in Orlando. See you there!

## **An Introduction to the Professions of Translation and Interpretation**

Get your copy of this 376-page introduction book published by our very own Japanese Language Division. Available for \$25 for ATA members; \$45 for non-members. To order, call ATA at (703) 683-6100 or e-mail ata@atanet.org.



と思われるオンラインヘルプのファイルのローカライズ(翻訳)作業を簡単に説明したいと思います。

### まず何が必要か?

ローカライズの作業で必要なもののひとつに翻訳メモリ(Translation Memory、略してTM)ツールが挙げられます。こうしたツールで代表的なものに、TRADOS、Catalyst、Déjà Vuなどが挙げられますが、まずなぜこうしたツールが必要か簡単に説明しましょう。ご存知のとおり、コンピュータの業界で起っている進化は止まることを知りません。こうした環境において、コンピュータソフトウェア開発企業にとっては、業界で生き残っていくために競合会社よりも先に優れたソフトウェアをいち早く市場にリリースすることが重要となります。市場にいち早くリリースするには、開発作業を短期間で行うことが唯一の方法であり、つまりはローカライズにかかる時間を短縮化することが期間短縮化のひとつの方法となります。

ソフトウェアは一度開発されたらそれっきりでなく、新機能を加えたアップグレードのリリースを何年かに1度行うのが常です。しかし、アップグレードのリリース(バージョン5から5.5へのアップグレードなど)は、通常過去にリリースした前バージョンのソフトのほんの一部だけを変更したものです。ソフトウェアの一部変更のためだけに、はじめからソフトウェア全体のローカライズ作業をやり直すにはあまりにも時間とお金がかかります。そこで、過去に一度ローカライズしたソフトウェアの翻訳をTMとして保存しておき、次のアップグレードで再利用し、極力翻訳にかかる時間を縮める努力をしています。こうした背景で開発されたツールが翻訳メモリツールです。

また、翻訳メモリツールにはもう1つの利点があります。いわゆるプロパゲーション機能です。コンピュータソフトウェアのマニュアルなどを読んでみると、操作手順を説明している部分でマニュアル全体に渡り同じ文章を頻繁に見かけます。プロパゲーション機能は、翻訳されるファイル内でこうした同じ文が何度も繰り返されて出現している場合、その文を一度訳すとファイル内の残ります

べての繰り返されている同じ文も自動的に訳され、結果として訳す単語数を減らし、翻訳に費やす時間を短縮化するものです。「そんな機能があってもそれほど翻訳時間の短縮にはつながらない」と感じられる方もいるかもしれませんが、実はこの機能がないとローカライザーとして質のよい翻訳を提供することは困難となります。例えば、オンラインマニュアル、プリントドキュメントなどの取扱説明書で、“Click the Finish button to close the window, or the >> button to continue.”といった文があるとします。この手の文章はマニュアルで恐らく数十回といった頻度で出現するでしょう。たった14単語の文章ですが、50回出現したら合計700単語。プロパゲーション機能により14単語のみ訳すことによって、700語すべてを訳すことができるわけです。また、このプロパゲーション機能がないと、翻訳の質に影響する例として次のようなケースがあります。翻訳家が前述の例文を「終了ボタンをクリックしてウィンドウを閉じるか、>>ボタンをクリックして作業を継続します。」と訳したとします。この翻訳家が作業を継続し、再度前述の例文に遭遇した場合、同じ例文を「終了ボタンをクリックするとウィンドウが閉じ、>>ボタンをクリックすると作業が続行します。」と訳したとします。この場合、両方の日本語訳は誤訳ではありませんが、2度目に訳された訳文は前回訳した訳文と異なるため訳の統一性を失い、質の悪い翻訳となります。しかし、この問題は翻訳メモリツールのプロパゲーション機能があれば簡単に解決できる問題です。こうした理由から翻訳メモリツールはローカライゼーション作業に欠かせないものとなるわけです。

ローカライズの作業に必要なものはTMツールだけではなく、その他必要となるものにグロッサリがあります。ここでいう「グロッサリ」とはUI用語の英語とそれに対する日

本語訳をリストまたはデータベース形式で保存したものです。ソフトウェアのオンラインマニュアルまたはプリントドキュメントを読むとおわかりいただけると思いますが、読者の理解度を高めるために、翻訳されたマニュアルには通常実際のソフトウェアのメニュー、エラーメッセージ、画面などが説明の文中に頻繁に使用されます。しかし、ユーザが読んで

**ソフトウェアのローカライズ  
作業で翻訳される  
コンポーネントの種類**

- ソフトウェアのユーザインターフェイス (リソースファイル等)
- オンラインヘルプ
- HTMLヘルプ
- プリントドキュメント(マニュアルなど)
- ビットマップ
- インストーラ
- ライセンス契約書
- Readme ファイル
- サウンドファイル(.wavファイルなど)

いるマニュアルの記述内容がユーザの正在使用するソフトウェアの実際の画面と一致していないと、マニュアルの意味がなくなりユーザに混乱を与えてしまいます。ここで前述の例をもう一度考慮してみましょう。オリジナルの英文は“Click the Finish button to close the window, or the >> button to continue.”

となつていますが、この“Finish”というボタンは、「終了」または「完了」と訳すことができます。ソフトウェア開発企業がUI用語を最終決定し、グロッサリの形式でUI用語を翻訳家に提供しない限り、翻訳家は「終了」と訳すべきか「完了」と訳すべきか判断できません。50%の確率だからといって賭けても、間違っていた場合はエンドユーザに混乱をもたらしてしまいます。こうした問題を避けるために、通常オンラインヘルプの翻訳作業には必ずソフトウェアのUIのグロッサリというものが必要となります。しかし、残念ながら、私の経験ではグロッサリが提供されないプロジェクトもあったことは否定できません。これは、ソフトウェア開発企業がローカライズの期間を短縮するために、UI用語が確定されていない段階でオンラインヘルプ、プリントマニュアルの翻訳作業を始めてしまうからです。

必要なもののもう1つにスタイルガイドがあります。テクニカルドキュ

Continued on Page 5

*Hideki Ishii is a Japanese translator/localizer and typesetter. He is currently working for a software localization company as a software engineer. He can be reached by e-mail at hishii@mindspring.com.*

メントの翻訳ではあまりスタイルガイドを使用することはないと思いますが、ソフトウェアのローカライズでは非常にスタイルガイドが重要となります。アメリカの大手ソフトウェア開発企業のほとんどは、ローカライズの作業時に使用しなければならないスタイルガイドというものを準備しています。こうしたスタイルガイドに沿わないと、ソフトウェア開発企業は訳されたドキュメントを「高品質な翻訳」とは認めてくれません。ではここでまた前述の例文に戻ってみましょう。“Click the Finish button to close the window, or the >> button to continue.”という英文を「終了ボタンをクリックしてウィンドウを閉じるか、>>ボタンをクリックして作業を継続します。」と訳したとします。この訳文は一見問題なく思えますが、使用しているスタイルガイドによっては全く受け入れられない翻訳となる場合があります。これはどういう

ことかという、ローカライズ作業に使用するスタイルガイドで「UI用語は半角角括弧で前後をくくり、はじめの半角角括弧の前、および終わりの半角角括弧の後にそれぞれ半角スペースを入れる。」という記述があったとします。すると、訳文における終了ボタンおよび>>ボタンはエンドユーザの画面に表示されるボタン(UI)であるため、この英文の日本語訳は「[終了] ボタンをクリックしてウィンドウを閉じるか、[>>] ボタンをクリックして作業を継続します。」とならなければならない、[終了] ボタンをクリックしてウィンドウを閉じるか、[>>] ボタンをクリックして作業を継続します。」(全角角括弧の使用)、[終了]ボタンをクリックしてウィンドウを閉じるか、[>>]ボタンをクリックして作業を継続します。」(角括弧の前後の半角スペースの無使用)といった訳文は正しい訳文とはみなされません。日本語にはカタカナにも全角、半角、括弧などの記号にも全角、半角があり、スタイルガイドで記述さ

れているとおりにどちらを使うかで翻訳の質が左右されます。こうしたスタイルガイドの内容をどの程度まで守っていれば質の良い翻訳とみなすかの許容範囲は、ソフトウェア開発企業によって程度が異なりますが、アメリカの大手ソフトウェア開発会社はこの点に非常にうるさく、守られていない場合は翻訳作業のやり直しとなります。この場合もちろん締め切りをのばしてくれることはありません。つまり翻訳家は徹夜作業で間違いを訂正することになります。こうした意味でもスタイルガイドは翻訳作業を行う上で非常に重要な「必需品」となり、「バイブル」として使用されます。

次号では...

次号JLD Timesでは、実際の翻訳作業について、翻訳家が注意しなければならない点を言語面、技術面の両方から御紹介したいと思います。お楽しみに。

## Review

By Diane Howard

コンサイス日本地名事典、第3版。東京:三省堂; 1989。3950円。ISBN4-385-15328-0。1292pp。  
常用漢字とその美順。本荘瑞石。東京:高橋書店; 1982。(Price and ISBN number not available) 94pp.

The reference works reviewed this issue help translators cope with the minor inconveniences of life: place names and handwriting. Either of these can disrupt a tight schedule and cause annoyance far out of proportion to the end solution.

It would be most convenient if everyone in Japan lived in downtown Tokyo and had a perfectly obvious address. However, people persist in living all over the country and sometimes in rather obscure places. The **コンサイス日本地名事典** allows the translator to look up place names by number of strokes and be given the pronunciation. Entries are arranged in あ、い、う、え、お order with the characters of the place

name following the hiragana. An explanatory paragraph then gives the location, lists former names, and may provide geographical information such as elevation and population. For 町, the reader is told whether the reading is まち or ちょう. The book is large enough to include most place names in Japan.

However, this is a “can’t live with it, can’t live without it” reference. Because the index is arranged by number of strokes rather than radical, characters are occasionally hard to find. Worse, the index is incomplete. I have sometimes gone straight to what I supposed was the correct pronunciation and found a place name that was not listed in the index. While one wishes that the book had been more carefully edited, it is still the best place name reference that I have found.

Handwriting is just plain difficult to read. If it weren’t, there would be no need for books like **常用漢字とその美順**. While the stated purpose of the book is to teach the proper stroke order for writing kanji, each of the commonly used characters is given in its printed form and then in three styles of handwriting. Characters can be found either by a stroke-number index at the begin-

ning of the book, or in kana order in the body of the work. At times of desperation, I’ve used a guess-and-check method: the character that would make sense here is X, and yes, in its most “artistic” form, that is indeed what it looks like.

The value of the book is further increased by an index listing characters that occur in names, since signatures are always difficult. It does not include the seal script form of characters. However, Chinese dictionaries of handwriting with examples from the printed form to the seal script appearance of characters are available and easily used by readers of kanji.

While the specific book on handwriting reviewed here may be out of print, similar works are bound to be available, and a good dictionary of handwriting can be a true time-saver.

*Diane Howard is a freelance translator working from Chinese and Japanese into English. She lives in Madison, Wisconsin, in an apartment that is (we hear) overrun with reference books. Diane specializes in medical and technical documents.*

Your hardworking 2000 JLD Conference Planning Committee is happy to announce yet another excellent lineup of presentations and workshops to suit the varying and discerning tastes of everyone in the division. The conference is scheduled to take place in the following order:

## DAY ONE

**Hiro Tsuchiya**

“Interpreting Implications of Product Liability Documents”

45-minute lecture

The number of lawsuits related to product liability in the U.S. far exceeds that in Japan. Technical writers and, more importantly, attorneys must review translated user’s manuals to protect manufacturers from possible litigation.

This session will examine original Japanese and English user’s manuals and discuss typical wordings present in product liability documents, particularly auxiliary verbs such as will, can, may, and could. Such words are considered key to interpreting the implications of product liability within documents and must be selected carefully by translators and technical writers based on the degree of importance.

In-house and freelance translators working on operation and user’s manuals for machines, equipment, appliances and instrumentation will benefit most from this presentation. However, the wordings and sample sentences the presenter will share will prove useful to all.

**Rachel Howe**

“The Next Wave: The Translation Pure Play”

45-minute lecture

The Internet is generating new translation opportunities. Software localization, multi-lingual web site development and content translation for pure plays are increasingly in demand. Meanwhile, traditional translation bureaus are migrating their businesses to the web. Some emerging pure plays

are now using advanced web-based profiling and matching technology to create a global out-sourced services market, which increasingly involves translation. This presentation provides a targeted overview of the globalizing online translation market—with a focus on the market for Japanese translation—to identify key trends in the interaction of online and traditional translation services.

**Atsushi Tomii**

“Causal Expression in Technical JE/EJ Translation”

90-minute panel

In writing or translating technical documents, causal expressions cannot be left untouched. The presenter will discuss various causal expressions both in Japanese and English. They include 1) ambiguities in Japanese causal expressions, 2) English causal expressions focusing on a) non-volitional subject sentence structure, which exists only in English and not in Japanese, b) to-infinitive of adverse use, and c) participial construction that expresses an effect, and 3) example sentences containing more than one pair of causal relationships in a context.

## DAY TWO

**Ken Sakai**

“Understanding Semiconductor Industry and Technical Terminology”

90-minute workshop

The Semiconductor industry and its technology have been growing dramatically, driven primarily by a high demand for Internet equipment and personal telecommunications products. For technical translators, an understanding of the world of semiconductors can lead to a higher volume of translation assignments. This workshop will review the long manufacturing process required to turn silicon wafers into computer chips. It will also introduce the equipment and materials used in the industry. A list of the key players in the industry will also be discussed.

Each semiconductor process area involves specific equipment and materi-

# JLD lineup ATA 41st Sept. 20 -



Ken Sakai

Hiroko Ohashi-McCoy

Tetsuro "Ted" Nozaki

als. In addition, the individual processes within in the total semiconductor manufacturing process require process-specific terminology to deal with the high level of complexity of the technology. A good command of the terminology associated with the equipment, materials and individual processes is the key to an understanding of the

# Unveiled for Conference 23, 2000



Rachel How



Benjamin B. Tompkins  
(on the right)



Hi Suzuki



Sumio Hirai



Atsushi Tomii

processes and technology in the semiconductor industry—an understanding that is essential for translating in this field.

**Hiroko Ohashi-McCoy et al.**  
“Localization Step by Step”

90-minute panel

This presentation will cover practical

areas of English-to-Japanese localization related to different formats of resource files, help files, document files, html and asp files. We will talk about what to watch for, where to translate, where not to translate, how to translate, and the reason behind it. We will discuss implementing a list of specifications you should ask from your client before you start a project, especially when a style guide/glossary is not provided.

**Josephine Howe, L. Douglas Havens, and Steve Sherman, M.D.**

“The Role of the International Conference on Harmonization (ICH) Guidelines in Japanese-English Biomedical and Pharmaceutical Translation”

90-minute panel

This session will focus on how the International Conference on Harmonization of Technical Requirements for Registration of Pharmaceuticals for Human Use (ICH) affects the terminology used in US adverse drug reaction reports, clinical study reports, and other documents pertaining to the development and marketing of pharmaceutical products regulated by the Food and Drug Administration.

We will discuss the role of the ICH as a movement to harmonize technical requirements for the registration of pharmaceuticals for human use in the EU, Japan and the United States. Terminology is one aspect of this harmonization; the Medical Dictionary for Drug Regulatory Affairs (MEDDRA), which mainly covers adverse reactions, is now in use. Several new ICH guidelines on clinical and non-clinical studies, including the GCP, have been enforced.

In addition, the latest information on MEDDRA and the guidelines, including Internet sources, Japanese translations and future trends, will be presented, together with an outline of some of the new terminology which ICH has generated.

## DAY THREE

**Tetsuro “Ted” Nozaki**

“How to Speed up Patent Abstract Translation”

90-minute workshop

The Japanese Patent Office discloses English abstracts of Publications of Unexamined Patent Applications on its web site for viewing worldwide about four months after they are laid open to the public. The presenter has translated some of these. Suggestions will be presented for improving translation productivity by using Japanese-English dictionaries made by collecting words, expressions and sentence structures appearing on the web. Moreover, instant recall of the source language and conversion to the target language will be discussed with a focus on terminology and differences in sentence structure.

**Benjamin B. Tompkins**

“Creating Order in a World of Eighty Billion Pages”

45-minute lecture

Many discussions on Internet resources overwhelm attendees with myriad information presented in no particular order. Although this presentation will offer useful Internet resources for Japanese <> English translators in particular, it will mainly cover strategies for locating, evaluating and indexing electronic resources. Participants will learn how to create and maintain an HTML ‘springboard’—a starting page that will allow them to quickly access the information and links they have collected. Translators and interpreters working in other language pairs are welcome to attend.

**Sumio Hirai**

“Monologue of a Retired Amateur Legal Translator”

45-minute lecture

This lecture will explore the differences between amateurs and professionals, discuss problems in Japanese-to-English translation (e.g., vagueness, subject omission, excessive katakana

Continued on Page 10

講義の内容は今までと同様に、翻訳/通訳の様々な面を追求するようバランスよく組まれていたようです。一点、機械翻訳については2つの講義がありましたが、やはり時代の趨勢ではないかと感じた次第です。残念ながら全てに参加することはできず、また日本語の講義ばかりに出てしまった嫌いがありますがご了承のほどを願います。

まず機械翻訳という言葉が出たので、そこから話しますが、1日目は佐藤幸浩氏、2日目は成田一氏という構成でした。佐藤氏は、PC-Trancer、ATLAS、Logo Vista X を主に実際に利用して体験した事実をもとに、操作の説明から特徴、長所/欠点などを細かな観点から説明されていました。これに対し成田氏の方も上述ソフトの他に数種のソフトを加え、同様に実体験を活かしての講義に加え、利用上の心得的な話などがありました。

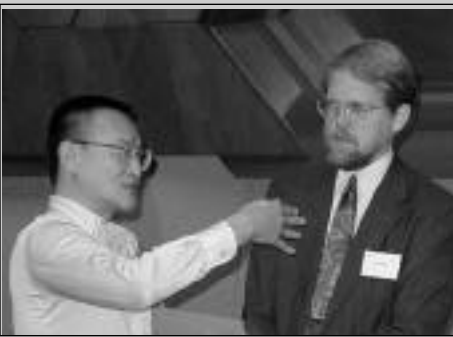
機械翻訳は我々翻訳者とは実に微妙な関係にあるもので、仲間にもライバルにもなり得るものとして、常にその動向を見据えていく必要のある項目です。少なくとも現時点で結論めいたことを言えば、私には「選択できる部下」だという考えがあります。翻訳の純な部分を機械にやらせて、人間はやらせる部分の選択や辞書の選択などを含めた方向付けをする、という分業体制が最も現実的なあり方ではないかということです。その点において成田氏も「アシスタントとして」利用すべきという同じ見解を伺っております。でもそうすると、これからの翻訳者は機械という分身をうまく使いこなしていく、ということが新たに与えられる課題となってくるのかなという感じがします。

機械翻訳については両氏の講義に挙げられたように、実に多くの種類があります。でもまだこんなものはないのかな、というもので分野別専用翻訳ソフトがあります(もしかしたら実はあって、私が知らないだけかも知れませんが)。例えば、特許なら形式やかなりの部分での単語に対する訳が決まっているので、その専用ソフトなんていうものがあるといいようなのですが、採算が合わないのでしょうか。

ところで佐藤氏ですが、私と同じように翻訳業を営みながら、毎度

毎度よくあれだけ色々ソフトについて研究を重ねて発表されているものだと関心しています。そこに胡座をかき続けるのは恐縮ですが、これからも頑張る我々のためになる情報を発信し続けていただきたいものです。

次に今回のちょっと変り種として、ゲーム翻訳についての講義がありました。講師は望月美恵子さんという方でした。この講義全体(実は富井先生と重なっていたため全部は聞いていませんが)を通して感じられたことは、この種の仕事は「遊び心だけではできないが、遊び心がなくてもできない」という微妙なセンスと、



Top: Wayne and Stacey Jehliks  
Bottom: Susumu Ando and Tom Gally discuss on translation.

Maynard Hogg photos

あとは何と言っても活力のある人でないといけないということなのです。話の中より、スクリプトの翻訳というのはごく一部の仕事であって、文化の対比を行いながら違いを明らかにさせ、総合的な「改造」を行うことがこのローカライズ作業には必要とのことでした。

ただまとまったものをもらって何時何時までに返すという私が通常行っているような仕事とは全く違い、プロジェクトの一員として、お客さん、開発者、セールス担当、などなど、多くの関係者との打ち合わせを繰り返しながら、一つの製品を作り

上げる作業であり、翻訳力のみならず、折衝能力、営業力、説得力、忍耐力、またソフト商品としての開発力やそれを販売する上での感覚的なものなども必要とされる内容です。表の華やかさがある分だけ、話を聞いているだけでも、「お疲れ様」と思わず言ってしまうような奥の深い大変な作業の様子を伺わせいただきました。

この講義のお金の話へと移るところで、これだけ負荷の大きい仕事ということなので、さぞかし醜い話が出てきそうな予感がし、それを聞いたらもう私の意思は完全に途切れてしまうだろうという思いもあって、隣の富井先生の講義へと向かうことにしました。

富井先生の講義は、いつものように和やかな雰囲気の中で聴衆を楽しませながら、今回は英文中に現れる記号についてのお話でした。最初に記号がテーマと伺った時に、これだけで1時間半もつのかな、と人ごとながらちょっと心配になったのですが、さすがに先生の豊富な情報源をもってすると、むしろ時間が足りなくなるくらいの内容となります。また話を聞いているうちに、「あれっ、確か記号の話ではなかったっけ」と思わせられるほど幅の広い内容でした。

特に印象に残る内容はセミコロンの意味についてです。この記号を挟んでは、補足したり、対比したり、相対していたり、じつに様々な意味があることを教わり、この講義に出でいなかったら本当にながしるにしていたのではないかと考えています。

実は後日、念願の富井先生の事務所訪問を実現し、その情報の源であるカード棚をこの目で拝むことができました。根気というよりも一つの執念のようなものを実際に感じました。まねしようとしてもとても一朝一夕でなしあげられるものではありませんが、世の多くの人々が書く、または話す内容を1つ1つ集め、それを分類、整理して、応用する、という過程は、我々のように言語を扱う立場の者の原点というべきもので、関心ばかりしていないで、少しは見習うマネくらいはしたいものだと考えています。

原点といえば、先生の講義そのものも「原点」を指し示してくれる内容で、普段うっかり忘れて、とんでもないことを犯してしまいそうなど

Continued on Page 9



ころに、「注意してくださいね」と優しく導いてくれる本当にありがたい講義で、これはATAでのお話も含めていつも変わらないところです。

ATAといえば、もうお一方、鈴木いずみさんが通訳の講義とワークショップを開催されていました。豊富な経験の中より心構えや気配りなどから、服装、筆記用具などの細かな注意点などを示す、正に実践的な内容の講義でしたが、いつものことながら、通訳されている方々のお話を伺うと背筋ゾクゾクの怪談話がまつわりついて、聞けば聞くほど恐ろしくなっていて、知りごみしてしまいます。だからというわけでもありませんが、申し訳ありませんが、この内容は連れていた恵美利(生後6ヶ月)が騒ぎ出し、途中で抜け出さなくてはなりませんでした。

守口稔氏の「日本語の分かりやすさについて」も何をかを考えさせてくれた講義の1つでした。これは私

のように英日を中心にやる人間にとっては特に重要な永遠の課題ではないかと思えます。内容はネイティブとしての日本語感という抽象的な論点から、分かりにくさはどこから生まれるか、それは日本語だけの問題か、そして分かりやすさを追求していくと具体的に何が求められるべきかという流れで話が進められました。

ともすると「私は日本人だ。日本語はわかっている。問題は英語だ」などと思いがちな我々に、啓示を与えてくれるものでした。ただ内容の特性から最後の質問の時間になると、どうしても文化的概念やら一般教育の問題やらに話が集中してしまいがちだった感がありましたが、全体的には、これもまた講師の数多くの経験と知識から大変参考になるよい内容でした。

最後にClosing Panelがありました。タイトルはImproving Productivity



Karen Sandness and Maynard Hogg

George Tokikuni photo

Featuringでしたが、水野麻子さんからは「コンピュータを利用した現代的な翻訳のしかた」の一例紹介と、Bill Lise氏からは、敢えて言わせていただければ、「プロの翻訳者とは」といった内容の話とディスカッションが行われました。何故そのような言い方をしたかということ、Lise氏の言われた「辞書を使うな」という言葉から話に花が咲き、その行方をたどっているうちに考えたことが次のようなものだったからです。

その意味はLise氏もおっしゃっていたように、「辞書を頻繁に使わなければならぬような仕事はとるな」ということで、仕事をとるのなら常にプロとしての結果を出すことに徹せよ、という大変厳しいお言葉だったと思うからです。自分のことをプロと呼びたいのなら、それだけの実力と覚悟とは備えておくべし、そうならぬうちは偉そうなことは言わずに勉強しろ、といったところでしょうか。「ではそうなるためにはどうしたらよいのか」という質問も

出ていましたが、それはプロ野球の選手に向かって、「130kmの球はどうやったら打てるようになるか」と聞いているようなものではないかと思いました。

でも振り返れば、今やっている仕事も言葉が鮮明でなく、やっぱり辞書をしょっちゅう引いているな、ということで、私にとってまだまだプロへの道は程遠いようですが、なにくそっと思って続けるしかないでしょう。

今回番外で登場したのはBlack Cheeseなる「変な外人」的な2人で、この日本文化をおもしろおかしく表現したショートコミックの大連発が、1日目の終わりに参加者を楽しませてくれました。

このような会合に参加することでいつも獲得できるものに一つ「やる気」があります。他の人たちと苦しみや楽しみなどについて何気なく語っているうちに「みんなも頑張っているんだな。俺も負けられないぞ!」と本当に力が湧いてくるのです。特に日本へ行くと、英語が読めて、書

けて、話せる人などざらにいます。私のようにイリノイ州シカモアなんてど田舎で「日本語できません」なんてやっているのと違って、日本で仕事をされている人たちはみな激戦地帯でしの



Hiro Sato talks about machine translation.

Maynard Hogg photo

ぎを削っているのです。だから厳しいお言葉や苦勞の度合いの違いなどにも驚かされることもしばしばです。

私など、普段は中に籠ってばかりいるために「御山の大将」や「井の中の蛙」になりがちで、そんなところから例えば、仕事が思うようにできないことを子供のせいにしてたり、まわりの人間が協力的でないせいにしてたりうっかりしてしまいますが、こうして多くの様々な環境で真のプロフェッショナルとして活躍されている方々にお会いすると、本当に自分が恥ずかしくなってきました。

またもう一つの側面で「やる気」を与えてくれることに街の人々の姿もあります。そんな暇を持たずに参加されているほとんどの方々には申し訳ないのですが、我々はその後少々日本に滞在して観光しました。毎日仕事、仕事で乱雑な生活していると気持ちや人との対応も乱雑になってしまいがちですが、日本の各地を回りながら、多くの優しい人、親切な人、一生懸命働いている人たちに会うことで、「こういう人たちのために私は働いているのだ。もっとよい翻訳をして役立ててもらわねば」という気持ちが湧き起こってきます。私にとって仕事をする上でのモチベーションは最も重要な要素で、このようなところからも思いがけない活力が得られました。

IJET-12 is scheduled for May 26-27, 2001 in Monterey, California.

Shinji Nakano worked in software development at NEC in Tokyo until moving to the United States in 1996. He is a full-time translator specializing in computer-related technologies and software localization.



By Eric Selland

金子兜太の俳句  
The Haiku of Kaneko Tohta

As long as we have been on the subject of modern haiku recently, I thought I'd introduce the work of Kaneko Tohta. Kaneko was born in Saitama Prefecture in 1919, and as a young man studied haiku under Katoh Shuson, a major figure of the time and a Humanist in ideology. Kaneko served in the Imperial Navy during World War II and was stationed on the island of Truk. His war experiences effected him deeply, and became the basis for his later concern with the social and human world in his later literary work. And yet he seems to wear these experiences lightly, shrugging off his war memories in the same way he does the phrase "avant-garde" which has been used to describe the kind of haiku he has written since the end of the war.

Kaneko's work is simple and direct, while at the same time innovative, unfettered by traditional rules of syllable count and seasonal word. And yet, his work is at the same time personal,

rather than simply technical, coming out of his years of experience first as a sailor, then a banker, and a resident of various cities around Japan, finally coming to settle down back in his native Saitama. His imagery is fresh and clear, causing the reader's eyes suddenly to open. It is that "awakened" feeling that most Americans associate with haiku, and yet it is done so in a totally un-philosophical manner. Perhaps this is the philosophy of no philosophy.

Kaneko is now Honorary Chairman of the Modern Haiku Association, and Editor in Chief of the haiku journal Kaitei. His work can be found in the affordable Asahi Bunko Gendai Haiku no Sekai series (vol. 14), as well as Kaneko Tohta Zen-Kushu (The Complete Works of Tohta Kaneko) (1975). I highly recommend ordering this and other volumes in the Asahi set, or picking one up on your next visit to Japan. Efforts are now being made to translate and publish some of Kaneko's work in English. Keep your fingers crossed.

Here's a small sampling of some of my favorites:

昼の虫まなこ開けば屋根ばかり  
Hiru no mushi manako hirakeba yane bakari  
Opening its eyes at noon

the insect sees  
nothing but roof

シニカルな小さな駅の売られる果実  
Shinikaru na chiisana eki no urareru kajitsu

Cynical  
the fruit sold  
at the little station

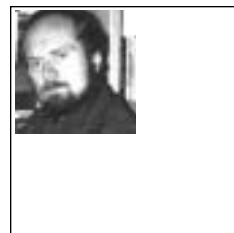
海を失い楽器のように散らばる拒否  
Umi o ushinai gakki no you ni chirabaru kyohi

Having lost the sea  
refusal is scattered about  
like musical instruments

タイルに映るくぐまる男の陰気な影  
Tairu ni utsuru kugumaru otoko no inki na kage

Reflecting in the tile  
the dismal shadow of a man  
stooped over

Eric Selland is an independent translator working and living near San Francisco. His primary interest is in translating Japanese literature as well as writing poetry, but he pays the bills by translating in the fields of business, finance and some technical subjects.



JLD lineup (from Page 7)

use) and in English-to-Japanese translation (e.g., complexity of the US legal system, redundant use of similar words, lack of formal translations for certain legal words), and ponder how best to serve client needs.

Izumi Suzuki

"Japanese <> English Interpreting Workshop"

90-minute workshop

This workshop introduces various methods to sharpen consecutive/simultaneous interpreting skills: idioms/kanji exercises (for commonsense); the Hendrickx method (for short-term

retention); quick word interpreting (for verbal reflexes); shadowing (for developing the skill of listening and speaking at once); repeating (for comprehension and short-term memory); paraphrasing (for comprehension & vocabulary); sight translation (for understanding of sentence structures; note-taking skills (for memory triggers and mental organization); and consecutive interpreting training. Participants can learn how to train themselves on their own, in pairs or in groups through the use of tapes and other materials. Due to the nature of workshop, the workshop size must be limited to the first 20 participants.

And as usual, the JLD portion of the

conference will conclude with the Annual Meeting. At the time this article was written, the ATA had given verbal approval of this lineup. The order and content of the presentations is subject to change. More information and speaker biographies are available on the JLD website at [www.ata-divisions.org/JLD/conf/](http://www.ata-divisions.org/JLD/conf/).

Benjamin Tompkins began translating professionally as an in-house translator and editor at a translation agency in Fukuoka, Japan in 1994. He now works as a technical Japanese-to-English translator from his home in Kansas City, Missouri and is studying to become a registered patent agent.

# Words and 言葉

By Jim Davis

In this column I present passages that may be of interest to translators working with Japanese and English. This segment includes an excerpt from a passage that deals with pattern recognition. I encourage the reader to first translate the passage without looking at the remainder of the column and then compare the resulting translation with the one provided. Comments and suggestions are always welcome (jdavis@engr.wisc.edu).

## パターン認識

入力した情報を整理分類して、それが既知のどのパターンにあてはまるのが認識すること。人間のもつパターン認識能力をセンサやコンピュータを組み合わせて実現する研究開発が進められている。

イメージセンサで読み取った画像情報のパターン認識は、さまざまな水準のものがある。製造工程での検査などは対象とするものが限定され、いくつかの要点をチェックすれば目的が果たせるので、簡単な方法を用いる傾向が強い。この場合に便利な機能がウインドウ（検査領域）の設定である。これは見本となる品物の像をモニタに映して、カーソル操作などによって長方形の領域を複数個設定する。検査すべき品物の画像と見本の品物の画像とをウインドウの内部で比較し、重なり合った部分の面積を基準に合否の判定を行うようなシステムが多い。例えばビールビンのラベル貼りの検査であれば、ラベルの左右両端、中央部など数ヶ所のウインドウでラベルの位置ずれ、めくれ、天地逆貼りなどが検出される。また液晶の文字表示装置では、7個の文字セグメントにそれぞれ交わるような細長いウインドウを設定している。

The first sentence is not really a sentence at all, but a fragment that defines the topic. The terms **整理** and **分類** re-

resent distinct, but related, activities, and should be treated as such. Including the title of the essay, the first sentence could read like this: “Pattern recognition is the process of arranging and classifying information that has been input, and identifying which known pattern that information conforms to.” The term **実現** (which appears in the second sentence) has been much debated over the years. The term essentially means, “making (something) a reality,” but people often employ words such as “realization,” “materialization” and “implementation.” The phrase ending with **を** **組み合わせて** looks as though it should be an independent clause, but this sentence illustrates what I call the “nested model” of sentence structure. (In the “nested model” of a sentence one phrase is completely contained within another phrase, just as one set of parentheses may be “nested” inside another set in a mathematical expression.) The entire phrase **センサやコンピュータを組み合わせて** can be treated as a prepositional phrase that modifies the verb **実現する**. This sentence could read, “Research and development efforts are being pushed forward to bring about, through the combined use of sensors and computers, the pattern recognition capability that humans possess.”

The third sentence contains the word **水準**, which usually means “standard” or “level.” Given the content of the sentence that follows, “level” is probably the better choice in this situation. The word **もの** probably refers to a system or a product that carries out pattern recognition: “There are many levels of pattern recognition systems that process the image information/data read in with an image sensor.” The rest of the passage deals with industrial applications, so from here on we may focus our thinking on these applications. The next sentence has three distinct clauses, and we can translate them in the order in

which they appear (“front-to-back model”): “For inspection in a manufacturing process there are limits as to the [kind of] item that can be the subject [for pattern recognition], and the goal/purpose can be achieved/accomplished by checking some [limited] number of key/main points. Thus, there is a strong tendency to use simple methods.” The word **機能** is usually treated as “function,” but in many cases “feature” works just as well. “In this instance one convenient feature/function is the establishment of windows (inspection regions/areas).” (The following sentence indicates that it is often necessary to employ several windows, so it is reasonable to make the term plural when it first appears.) The topic of the following sentence refers back to the process of establishing the windows. “This involves projecting onto a monitor an image of the item to be used as a sample/reference and then using a cursor to establish some number of rectangular regions [in that image].” The next sentence describes the two steps in the process, but in this sentence both descriptions modify the word “system” in the main clause (“back-to-front model”). The suffix **べき** is usually translated “should (do)” or “ought to (do),” but in this case a literal translation sounds too stiff. Translating **検査すべき品物** as “the item/product to be inspected” is more consistent with the tone of the essay. “In many systems an image of the item to be inspected and an image of the sample/reference item are compared within the window(s), and the [total] area of the portions that can be superposed is used as the criterion in making the decision to accept or reject.” For the first example it is probably best to simply describe the problems using the most natural English expression possible. One option would be the following: “For example, in an inspection for

Continued on Page 12

# Chicago area translators help each other

By Susan Nakano

A small group of Japanese-English translators living in the Chicago area calling themselves the Japanese Language Group (JLG) recently held a "conference" at the home office of one of the members of the group, Mr. Hiro Tsuchiya.

The Japanese Language Group of Chicago is now in its fourth year. You can read more about the history and purpose of this study group in the May 1999 issue of *The ATA Chronicle*, in which Hiro Tsuchiya talks about starting a local study group, the goals and approach to working together. This support group has long talked about conducting a meeting in a conference format, in which each member may offer a presentation concerning a translation topic of general interest to the group. This meeting finally took place on March 25.

The Japanese Language Group has met almost monthly for the last four years. Monthly discussions generally revolve around topics of interest to one or more people attending the meeting on any day. In other words, if someone has had a specific problem with a translation, this might be offered to the group for advice. We may discuss specific terminology, a troublesome sentence structure, or recurring document formats such as business cards or koseki. Other times, we may share a glossary one of us has developed or discuss a general grammar and usage issue. The

person wishing to discuss a topic will simply make enough copies of their prepared documents for all - and the discussion begins.

This format has worked well for us over the last four years. For a change of pace and to add some energy to our activities we decided to conduct our meeting in a different format for a day. We chose to create a conference-style format.

The Chicago JLG members are both in-house and freelance translators with a wide range of experience and expertise. Each participant chose a topic they thought would be of value to the group. Then, thinking that this would be an opportunity to expand our membership, we created a simple web page and invited participation through the Honyaku mailing list (<http://www.crossroads.net/h1/index.html>). We were thrilled that this introduced us to other Chicago-area translators who attended this and subsequent JLG meetings.

The day began with mingling over coffee and donuts and then we quickly got down to business. As this was our first attempt, we chose to make the format as simple as possible. People that chose to present were given a 30-minute time period to discuss their topic of choice.

Ten people participated in the day with eight offering presentations. Topics ranged from grammar to mini-

paggers and calculators. "Alternatively, for a liquid crystal character display (seven) long, narrow windows are established--one corresponding to/overlapping each of the seven character segments."

*From the editor: This will be Jim Davis' last column until after Dec. 2001, when he will have finished his project on an intermediate-level textbook for technical Japanese. Thank you, Jim, for all*

minizing physical stress in a home office. The course of the day was as follows:

- Workshop: Usage of Articles
- From Salary Man to Freelance Translator
- How a Company Evaluates In-house Translators
- Localization Tools and Useful Web Sites
- Good Physical and Working Conditions for Freelancers
- Singular and Plural Forms of Nouns
- Running a Translation and Interpretation Business
- My Translation Process

All presenters spent a good deal of time preparing for the day and this was evident in the quality of the presentations.

We found the day to be so successful that we may make this an annual event. But even if we never repeat it, we all benefited from additional insights shared and the boost in vitality we felt. There are other local study groups out there and we encourage you to give this approach a try.

*Susan Nakano and her husband, Shinji, work as freelance translators of computer-related documentation. They also provide software localization services.*



*the wisdom you've provided for us!*

*Jim Davis is Associate Professor and Director, Technical Japanese Program, Department of Engineering Professional Development, University of Wisconsin-Madison. He is a past administrator of the Japanese Language Division of the ATA.*

